



TITLE:

大学院の同期生として (吉田城先生
追悼特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

宮下, 志朗

CITATION:

宮下, 志朗. 大学院の同期生として (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出).
仏文研究 2006, S: 322-326

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138054>

RIGHT:

大学院の同期生として

宮 下 志 朗 Shiro MIYASHITA

吉田城さんが、東大の大学院に入ってきたのは、1973年の春である。その時のことを思い出してみると、わたしには、辻邦生の次の文章が浮かんでくる。

「終戦後のごたごたが、ようやく収まりだした時期だったので、この学年に、天下の秀才が集中したということもあったのだろう。年齢もばらばらで、戦争中の経験も各人各様であった。ただ共通して、誰もが渡辺一夫氏の魅力に惹かれて仏文科に集まってきていた」(辻邦生「自伝抄」、『時刻のなかの肖像』新潮社)。

辻は、日経新聞に連載した回想録でも、同じような発言をしていた気がする。この文章の直前には、フランス文学を志した人間ならば、だれもが知っている評論家・学者の名前が書き連ねてある。そして、その内の何人かに、われわれの世代は教えを受けたのである。辻の文章を思い出すといったのは、まず、われわれの世代にも、大学闘争(紛争)という「ごたごた」が存在したからだ。具体的には、東大入試の中止という、世間的な大事件が起り、日比谷高校出身の城さんは、それに遭遇してしまった。そこで京大に入学、その4年後に大学院生として、当然のごとく東大に戻ってきたのである。1学年が10人で、「年齢もばらばら」であった。すでに在仏・留学経験のある者とか、わたしのよう、浪人・留年を重ねたあげくに大学院に入った人間もいて、最年少の城さんたちと、最年長のIには4歳の開きがあった。あころの仏文科は隆盛をきわめ、大学院の競争率も6倍とか7倍とか噂されて、入るだけでもひと苦労だった。もちろん、城さんみたいに、学者になるのだという人生の目標もかなり明確に定まり、おまけに能力も十分に備わっているものだから、すーっと難関をクリアする人もいる。でも、おおかたの人間はそうではなくて、わたしも一度落とされた。入試の当日、いっしょに昼食を食べた、高校からの友人で、学生運動に入れあげていたSも不合格組で、その後も、長いこと塾の教師で食べていた。いまは著名な評論家となったKさんも、だめで、結局は国会図書館に勤めた。「あいつらの方が、能力・才能ともにあるのになあ」、幸運にも合格したわたしの最初の感想は、こうしたものであった。母校の大学院に受かることができずに、他大学に進学した者や、出版社・新聞社に就職した者なども、かなりいたはずだ。

10人の同級生のうち、他大学からの入学者が4人いて、こうした意味でも

「ばらばら」であったことは、今から考えると、とても幸福なことだったと思う。とにかく大学院まで行ってから考えようという、モラトリアム気分の人間も、わたしを含めて数人はいた。そのうちのTなどは、なぜか授業にもほとんど出席しないまま、いつのまにか消えてしまった。辻の学年のように、「天下の秀才が集中した」かどうかは知らないけれど、この星雲の中には、ひときわ輝く城さんがいたし、留学を経験済みの最年長者で、こちらなどはまだ見ぬ国であるフランスの最新の知的動向にもじかに触れてきたIという逸材もいた。彼は、城さんと同じくブルーストを選び、優れた博士論文を書きながら、その後は教師家業以外はなにもせず、敢えて(?) ブラックホールとなる道を選んだ。そのほか、現在は、月に20本だけの連載を抱えるという、超多忙の物書きとなったKとか、紅一点で、いまはパリの日本文化会館で采配をふるOさん、未来社社長のN、『薔薇物語』の翻訳を出し、日本館館長もつとめたSもいたのだから、多士済々であったのはまちがいない。

城さんは、たしか高校時代から日仏学院に通っていたとかで、われわれとは、フランス語の能力は雲泥の差であったにちがいない。「すごいなあ」、これが正直な感想であった。でも、彼は別に、そんなことを鼻にかけることなどいっさいなくて、いつでも明るく、はきはきとした物言いで、みんなを楽しませてくれた。ダンディな英文学者の息子さんで、そうした毛並みのよさが、見てとれた。

やがて留学を終えると、城さんは阪大を経て、数年後には母校の京大に戻った。そして、先輩格の吉川一義さんと競うようにして、ブルーストの草稿研究を次々と活字にしていく。日本のフランス文学研究も、フランス本国という土俵で、正々堂々と勝負を挑む時期を迎えていた。塩川徹也、吉川一義、吉田城の3人が、傑出した存在であった。

いっぽう、なんとか地方の大学に職を得たわたしは、四年後、幸運なことに私大のフランス語教師として、東京に戻ることができたけれど、まだろくに論文も書いておらず、無為な日常の合間に、いわば土俵の外から、こうした先輩・友人に声援を送るだけだった。やがて1984年、わたしは初めてリヨンに足を踏み入れて、ラプレー研究は無理としても、その周辺ならばなんとかまとめられるかもしれないと、決意を固めた。その時、城さんは、パリで日本語を教えながら、テキスト校訂の仕事などを、猛烈にこなしていたはずだ。でも、パリで会った記憶はない。そして1987年、城さんから、プレイヤード版『失われた時を求めて』第1巻が送られてきた。いま、それを取り出してみると、謹呈のカードとともに、「ブルーストの新しい素顔」と題して、彼が朝日新聞に寄

稿した文章の切り抜きが挟んである。そこで彼は、草稿研究の意義をわかりやすく説明してから、今度の新版ブルーストが、旧版の倍の厚さになってしまったこと、その代わりに、「書くことに病弱な生命を捧げつくした」男が、「自分の文章を読み直しながら、新しい筋書きや新奇的なイメージを創造していった」という、未知の素顔が、草稿研究によって立ち現れたことを書いている。まさに快挙としかいいようがない。わたしは、友人として心から誇らしく思い、彼にその旨を書き送った。そして、自分もがんばらなくてはと誓いを新たにするとともに、編集者のアドバイスをしたがって、遅まきながらワープロ（「文豪」という名前だったのだから、笑ってしまう）を購入して、リヨン・ルネサンス論の執筆にいそしんだ。このようにして、吉川・吉田という偉大なブルースティアンが身近にいて、わたしはかなりの影響と刺激を受けている¹⁾。

城さんは、週3回の人工透析を行いながらも、しばしばフランスなどの学会に出かけていた。曜日によってはお酒も飲めるけれど、決まった時間になるとぼやんとしてくるとも語っていた。たまに会っても、いつでも元気そうに見えて、宿痾を悟らせることがなかった。あの明るい調子で、いやあ注射のせいで腕が上がらないんだよなどと、けろっというのである。大変な、精神力だなあと、こちらは驚くしかなかった。ただ、こちらがどうしても城さんの病氣と結びつけてしまうせい、次第に、神経症や疾患といったテーマへの興味を強めているようにも感じられた。パリの大学都市で共に1年間をすごした時には、わが家にはゼロ歳児がいたせいで、足繁く行き来できなかった。でも、たまたまレパノン館の吉田家を訪ねた折りに紹介された山田広昭さんが、その後、われわれの同僚となったりもした。

ある時、親しくしていた平凡社の編集者に、ポミアンという歴史家の『コレクション』という厚い本の訳者探しを頼まれた。ヴェネツィアのことがよく出てくるし、美術の話題も多いからと、吉田城さんがやってくればいい翻訳になりますよと、ごく軽い気持ちで名前を出してみた。ブルーストに関係するわけでもないのに、断られることは覚悟していた。ところがなんと、人がいいというか、典子さんと二人で翻訳を引き受けてくれたのだ。迷惑な話だよなと、ご本人は思っていたかもしれない。でも、この翻訳の副産物が大きかったから、彼も許してくれるだろう。数年後、城さんは『《失われた時を求めて》草稿研究』を、その平凡社から上梓したのだ。これは、わたしのような素人が読んでも、よくわかるように、実にクリヤーに書かれた、本当の名著だ。名著というのは、その道のプロをもうならせるだけではなく、その外部にいる読者にも、問題の在処なり、その学問の快樂なりが、よくわかるように書かれた著作をい

う。たしかに象牙の塔にこもるぐらいの気迫で研究しなければ、真の学問的な貢献などできるはずもない。でも、その成果が、ある程度広い範囲で伝わらないことには、対象となった作品そのものに働きかけることはできない。文学とは、なんといっても、読者がいてなんぼの世界だと思うのだ。学問共同体で通用するジャルゴンで、いくら優れた論文を書いても、いや、優れた論文を書けば書くほど、とりわけ外国文学の場合は、それが文学的な力を発揮することはむずかしい。優れた外国文学者ならば、こうした逆説にも敏感なのであって、向こう側とこちら側との往還をも意識するにちがいない。したがって、翻訳という作業にも、積極的にチャレンジしていくものなのだ。城さんも、もちろん、そうした学者だった。ポミアンの件については、聞きそびれたけれど、ブルースト関係の翻訳などは、積極的に引き受けていた。そして、生成研究の魅力をたっぷりと伝える、『《失われた時を求めて》草稿研究』を残してくれた。主著の、間接的な産婆役をあいづとめたことは、わたしの誇りなのでもある。

ところで、わが専門の16世紀文学には草稿など存在しない。でも、草稿研究に引っぱられて、わたしは、その代用品とばかりに、『家事日記』の世界にのめり込んでいき、膨大な日記を残したグーベルヴィル殿の故郷コタンタン半島——先端がシュルプールの町だ——に足を運ぶようにもなった²⁾。ある時、城さんに、田舎領主グーベルヴィルが暮らしたコタンタン半島の話をしたら、足を伸ばしたことがあるというではないか。彼が偏愛する作家バルベール・ドールヴィーの故郷なのだという。それからしばらくたって、ひょんなことから、ゾラ愛好家にすぎないわたしが、『ゾラ・セレクション』（藤原書店）の編集を、小倉孝誠さんといっしょに引き受けることになった。そこで、典子さんが、ゾラに惹かれて、研究していることを思い出して、『ボヌール・デ・ダム百貨店』の翻訳を引き受けてもらったのだけれど、この長編は、主人公がコタンタン半島の田舎町ヴァローニュからパリに出てくるシーンで始まるのだ。こうして三人三様に、コタンタン半島につながりができたというのも、なにかの因縁だろうか³⁾。そういえば、もうひとつ奇遇だなといえることがあった。城さんから、『芥川龍之介全集 第23巻』（岩波書店）が送られてきた。実は、この全集の担当編集者は、わたしのかつての学生なのだった。しかも、全集の編集を統率する紅野敏郎先生こそは、なにを隠そう、国文の学生で芥川で卒論を書いたとかいう、わが細君（現在は木口木版をしている）の指導教授でもあり、よく存じ上げている方なのだ。で、そこにブルーストの草稿研究の権威としての城さんが、請われて、芥川の「手帳」等々の本文校訂に参加したという次第。しかも日本文学の側から校訂にあたったのが、全集の編者で、紅野敏郎先生の弟子筋

にあたる、石割透さんという方で、わたしは面識はないものの、その後まもなく、この透さんの可愛いお嬢さんが、われわれフランス語教室の嘱託となるという偶然が続いたのである。この『芥川龍之介全集 第23巻』には、『羅生門』の草稿が、加筆・訂正が読みとれるような形で校訂がなされて収められていて——このことにも、城さんのアドバイスがあったのか？——、城さんは、この短編を生成論の視点から論じてもいる⁴⁾。

2003年の夏、主任教授として、彼はわたしを京大の集中講義に呼んでくれた。ずいぶん前、これは中川久定先生のお名指しで、まだぼろぼろの文学部棟が健在の頃にも、呼んでいただいたことがあったけれど、このたびは京大のキャンパスもずいぶんと小ざれいになり、門のそばには、しゃれたカフェテリアがあったりして、びっくりした。祇園祭の時期で、例によって京都は猛暑だった。ある夕刻、みんなでビヤホールにくり出した。東山の「大文字」がよく見える、ビルの屋上のビヤホールだ。トマト色のシャツを着た城さんといっしょに、紙のエプロンを付けて、ジョッキを傾けながら、パーベキュー料理を食べた。いかにもアンチームな雰囲気、みんな、城さんを敬愛していることがよくわかる。駒場のフランス語教室という大部屋住まいの身だと、なかなかこうはいかないから、羨ましかった。

ふと彼が、疲れるから、もうフランスには行かないというようなことを口に出した。しかしながら、その2年後に、天国に行ってしまうなどとは夢にも思わなかった。お通夜の晩、典子さんが、病気になってから20年間も、よく生きながらえたと思ったりもするのですと挨拶された。そうかもしれない。でも、もっと長く生きていてほしかった。

- 1) 吉川一義さんは、わたしと同年だが、大学院では先輩にあたる。その後、辞書をいっしょに作ったし、都立大でも同僚だった。
- 2) このことは、次のエッセーに書いている。宮下志朗「ある家事日記について」、『エラスムスはブルゴーニュワインが大好き』白水社、1996年。
- 3) 典子さんとは、それ以前に、『バルザック「人間喜劇」セクション』（藤原書店）の『金融小説名篇集』1999年、を共に担当した。
- 4) 吉田城「盗人の誕生——『羅生門』推敲プロセスに関する一考察」、『文学』1998年秋号、岩波書店。

(みやした・しろ う 東京大学大学院教授)